

# 教員養成学部の学生における授業観察に関する 視点の検討

Consideration about Point of View the Classroom Observation by University  
Student of a Training School for Teachers

— 小学校 6 年生算数科の授業観察を通して —  
Observation Points of a 6th Grade Mathematics Classroom  
by a Training University Student

福井 美有  
Miyu Fukui

常葉大学教育学部  
Faculty of Education, Tokoha University\*

〈あらまし〉 教師の指導力量を向上させるうえで授業観察力は重要である。そこで、本研究では、教員養成学部の学生の授業観察の視点を明らかにし、授業観察力と教授技能の関係性を考察した。学生が授業観察をする際に「授業を成立させている要因と思われる指導場面、学習環境」について写真撮影を行い、学生の授業観察の視点の調査を実施した。その結果、学生は「教師の指導」「子どもの学習活動」「教室環境」という視点で授業観察を行なっていることが示唆された。また、「教師の指導」を北尾（1986）の教授技能の指標に基づいて分析した結果、教授技能の基本的技能の部分を多く観察していた。一方、教授技能の上級技能では、学生の授業観察の視点の数が減少していることが示唆された。

〈キーワード〉 教師教育 教員養成 授業観察 教授技能

## 1. はじめに

近年、団塊の世代の教師の大量退職により、若手教師が大量採用され、その割合が大幅に増加している（脇本 2015）。中央教育審議会（2015）は、若手教師の大量採用により、教師の資質能力の向上について、経験豊富なベテラン教師や中堅教師から若手教師への知識・技能の伝承が困難になると予測している。

また、中央教育審議会（2010）は、若手教師については、実践的指導力などの教師としての基礎的な力が十分に身につけていないことを指摘している。そこで深見（2015）は、教員養成における教員志望学生の実践的指導力の向上が期待されていると述べている。

その一方で、実践的指導力のほかに、三島（2008）は、授業を見る力、授業分析力、授業解釈力、授業観察視点などの授業観察力も教師

の力量を検討する上で重要な役割を担っていると述べている。また、生田ほか（2002）は、教師にとって授業のある瞬間に何が見え、見えたものをどのように解釈するのかという認知過程に教師の実践知があると述べ、授業観察力の重要性を指摘している。さらに、姫野（2017）は、教師にとって「みえる」ことは授業改善の基盤と言え、と述べている。これらのことから授業観察力の重要性が伺える。

教職経験年数による授業観察力の差異について、森ほか（2004）は、教職経験年数の違いによる授業観察時の思考の差異などを明らかにしており、教師の指導力量の向上を図るうえで、授業を「観察する」行為は重要な意味をもつと述べている。また、芥川ほか（2003）は、カード構造化法を用い、学生と教職経験のある教師における授業観察の視点の差異を検討す

る中で、教職経験後、学習者を見る目がより具体的に細分化され、きめ細かく生き生きと授業をイメージしていることを明らかにしている。また、秋田(1991)は、経験豊かな熟練教師と若手教師が他の教師の授業をVTRで参観することを通して、熟練教師と若手教師の実践的知識の違いを検討した。その結果、熟練教師と違い若手教師は、参観した授業に関し、「授業の事実を表層的に捉えるだけで、学習者の理解状況を推論したり、発言を授業の場の関係性の中で捉えたりすることがほとんどできていない」ことなどを明らかにしている。これらから、教師の授業観察力は経験を重ねていくことで形成されていくものであると考えられる。

丸山ほか(2013)は、体育のティームティーチングにおいて、トランシーバーを用いて授業者である学卒院生と現職院生が互いに発話を共有する実践を行っている。その結果、学卒院生の学習者に対する具体的な発話が増加し、学習場面に応じた発話をする姿が見られるようになったと報告している。また、三島(2010)は、授業検討会による授業観察力の変容において考察しており、その中で、大学生の授業観察力の向上には、多くの意見を表出させることが重要であると述べている。さらに、大島ほか(2016)は、大学生の授業観察力の向上を目指し、タブレット型端末を活用した授業観察・検討会の方法を開発している。このことから、授業観察力を教員養成の段階で育成することが可能であることが考えられる。

教員養成段階で授業観察力を育成していくことは、教育実習の重要な目的である(三島2010)。三島(2008)は、教育実習生の実習前後の授業観察力の変容を検討する中で、学生は教育実習後、授業観察力が全体的に向上することを明らかにしている。また、磯崎(2002)は、教員養成段階の教育において、実践的力量を形成する場として教育実習は重要であると述べている。このことから、教育実習は授業観察力を育成する場としても重要な役割を果たしていることが示唆される。

しかし、教育実習の課題として、実習期間が短いことが挙げられる(文部科学省2011)。これを踏まえると、教育実習の短い期間を有効的に活用する必要があると考えられる。

## 2. 研究の目的

本研究では、学生が教員養成カリキュラムの中の教育実習を有効的に活用するために、授業観察を通してどのような視点を持ち、授業を把握することができるのかを明らかにすることを目的とする。その中で、授業観察の視点を教師の教授スキルの指標に基づいて分析することを通して、授業観察力と教授スキルの関係性を検討していく。

## 3. 研究方法

### 3.1. 協力者の選定

協力者はX大学の教員養成学部2年生(2017年入学者)2名、3年生(2016年入学者)1名、4年生(2015年入学者)10名、教職大学院2年(2017年入学者)1名の計14名である。2年生は教育実習の経験がなく、3年生、4年生、大学院2年生は教育実習の経験がある。

### 3.2. 調査の方法

調査時期は、2018年6月27日である。参観した授業は、Y小学校6年生の4時間目の算数「分数のわり算」の単元であり、「分数で表した割合」の授業であった(図1)。

協力者14名にカメラ(スマートフォンを含む)をそれぞれ所持させ、「授業を成立させている要因と思われる指導場面、学習環境を撮影してください」という課題を事前に伝え、その課題のもと授業時間内で写真を撮影させた。協力者は45分間の授業の間、教室内を自由に動くことができ、撮影するタイミングや場所も教室内であれば自由とした。また、撮影する枚数の指定もしないこととした。

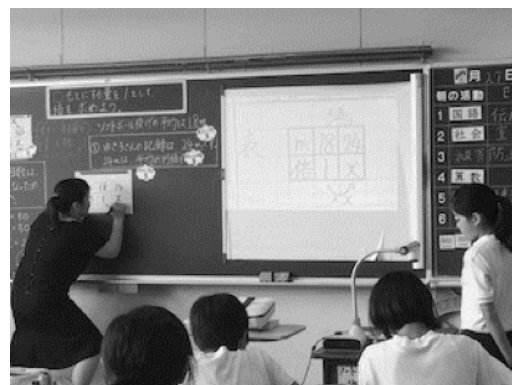


図1 実際の授業風景

その後、写真一枚一枚に、①撮影した写真の説明、②授業を成立させている要因と思われた理由、の2点を記述させ、協力者から回収した。

## 4. 結果及び考察

### 4.1. 授業観察の際に撮影した写真の分類

授業観察の際に撮影された写真を分類する上で、三島(2008)、本多(2017)、瀧辺ほか(2000)を参考に行った。三島(2008)は、教育実習前後の授業観察力の変容を検討する中で、因子分析を行い、授業評定項目を抽出している。また、本多(2017)は、小学校管理職の授業観察を行う視点と洞察を質問し調査から明らかにしている。これらの評価項目には学習環境の視点が見当たらなかったため、学習環境についての視点の項目については、瀧辺(2000)を参考にした。瀧辺(2000)は、ベテラン教師の学習環境構成を継続的に分析しており、学習環境の種類を示している。これらは、授業や教室環境を観察する中で抽出された評価項目という点で共通しており、本研究のカテゴリーとサブカテゴリーを分類する上で参考にできるものと判断した。

「①撮影した写真の説明」の記述から抽出した視点を分類した。表1は、視点について分類した結果である。分類された視点は大きく3つであり、それぞれ「教師の指導」「子どもの学習活動」「学習環境」と命名した。これらについては、本多(2017)の小学校管理職が授業観察を行った際の視点を分類した結果、視点が多かった上位の3つである「教師」「子ども」「環境・もの」を参考にした。

「教師の指導」のカテゴリーは、「(A) 授業内容」などの7項目からなり、三島(2008)を参考に分類した。「子どもの学習活動」のカテゴリーは、「(H) 協働学習の様子」などの5項目からなる。ここで「子どもの学習活動」についての評価項目を明らかにした先行研究が見当たらなかったため、カテゴリーの生成を試みた。「学習環境」のカテゴリーは、「(M) 教室」などの4項目からなり、瀧辺ほか(2000)を参考に分類した。

それぞれの写真の枚数は、「教師の指導」が254件(45.7%)、「子どもの学習活動」が146件(26.3%)、「学習環境」が156件(28.0%)

であった。

### 4.2. 授業観察スキルの評価項目による分析

小柳(2009)は、学部から大学院につながる体系的な観察実習の方法を明らかにしている。その中で、授業観察における指導の段階を学部で重点的に指導する項目、学部と大学院で螺旋的に指導する項目、大学院で重点的に指導する項目の3つに分類している。

そこで本研究では、授業観察力を明らかにするために、学部で重点的に指導する項目を授業観察の基本技能、学部と大学院で螺旋的に指導する項目を中級技能、大学院で重点的に指導する項目を上級技能とし、試行的に分類した(表2)。

授業観察の視点を基本技能、中級技能、上級技能で分類を試みた結果、基本技能が281件(50.5%)、中級技能が146件(26.3%)、上級技能が129件(23.2%)であった。学生は基本技能にあたる視点を多く有しており、上級技能に上がるにつれて、授業観察の視点の数が減少していることが示唆された。

### 4.3. 教授技能の水準別に見た「教師の指導」

北尾ほか(1986)は、教授技能は習得が容易なものから困難なものまで階層化していると述べている。この3つの水準は、個人レベルでの技能(基礎)、対人レベルでの技能(中級)、集団的レベルでの技能(上級)としている。これらの水準を参考に「教師の指導」をさらに分類した(表3)。

教授技能水準別に「教師の指導」の視点を分類した。その結果、学生の授業観察の視点は、教授技能の中の基本的技能について190件(76.0%)、中級技能について33件(13.2%)、上級技能について27件(10.8%)であった。このことから、上級技能に上がるにつれて、授業観察の視点の数が減少していることが示唆される。これは、授業で実践できないことは授業観察においても気がつくことができていないことを表していると考えられる。

また、授業観察の視点においても同様に、上級技能に上がるにつれ、視点の数が減少していた。以上より、授業観察力と授業実践力が関係していることが示唆される。

表1 授業観察の視点の 카테고리

カテゴリー	サブカテゴリー	視点の数 (割合)	カテゴリーの合計 (割合)
(A) 授業内容	(A-1) 指導内容に応じた学習形態	13 (2.3%)	46 (8.3%)
	(A-2) 発問の内容が具体的である	1 (0.2%)	
	(A-3) 授業の終わりのまとめが適切	9 (1.6%)	
	(A-4) 教科書の活用	9 (1.6%)	
	(A-5) 子どもたちの理解を促す手立て	13 (2.3%)	
	(A-6) 身近な教材の活用	1 (0.2%)	
(B) 教師対応	(B-1) 机間指導	14 (2.5%)	33 (5.9%)
	(B-2) 児童の発言やつぶやきを大切に、学級全体のものにするように工夫	5 (0.9%)	
	(B-3) 子どもの発言をしっかりと聞く	3 (0.5%)	
	(B-4) 発言を促す手立て	1 (0.2%)	
	(B-5) 理解度を把握するための手立て	10 (1.8%)	
(C) 教師の話し方	(C-1) 表情、身ぶり、手ぶりをに入れて話す	2 (0.4%)	2 (0.4%)
(D) 教授メディアの活用	(D-1) 板書カードの準備等	37 (6.7%)	151 (27.2%)
	(D-2) 計画的に板書をしている	35 (6.3%)	
	(D-3) 導入で何を学ぶかはっきりさせる	3 (0.5%)	
	(D-4) 板書が速すぎたり遅すぎたりしない	3 (0.5%)	
	(D-5) 目標をはっきりさせる	14 (2.5%)	
	(D-6) 板書で定規を活用	18 (3.2%)	
	(D-7) 黒板の整理	2 (0.4%)	
	(D-8) スクリーンの活用	21 (3.8%)	
	(D-9) タイマーの活用	1 (0.2%)	
	(D-10) 実物投影機の活用	17 (3.1%)	
(E) 授業準備	(D-1) 略案	2 (0.4%)	15 (2.7%)
	(D-2) プリント準備	13 (2.3%)	
(F) 授業形態		3 (0.5%)	3 (0.5%)
(G) 学習規律の維持につとめているか		4 (0.7%)	4 (0.7%)
(H) 協働学習の様子	—	27 (4.9%)	27 (4.9%)
(I) 教科書の持ち方	—	1 (0.2%)	1 (0.2%)
(J) ノート	(J-1) ノートを書く姿勢	4 (0.7%)	42 (7.6%)
	(J-2) 下敷きを敷く	2 (0.4%)	
	(J-3) ノートの内容が同じ	14 (2.5%)	
	(J-4) 色の使い分け	12 (2.2%)	
	(J-5) 子どもたち自身が考え見やすく書いている	6 (1.1%)	
	(J-6) 鉛筆の活用	1 (0.2%)	
	(J-7) ノートを書くスピードが教師と同じ	3 (0.5%)	
(K) 授業態度	(K-1) 話の聞き方	8 (1.4%)	29 (5.2%)
	(K-2) 発表の仕方	13 (2.3%)	
	(K-3) 姿勢	8 (1.4%)	
(L) 児童の自動化	(L-1) 配布物の処理	13 (2.3%)	47 (8.5%)
	(L-2) 定規の活用	17 (3.1%)	
	(L-3) 実物投影機の活用	17 (3.1%)	
(M) 教室	(M-1) 什器	4 (0.7%)	95 (17.1%)
	(M-2) 机上	28 (5.0%)	
	(M-3) 空調	1 (0.2%)	
	(M-4) 採光	1 (0.2%)	
	(M-5) 整理整頓	61 (11.0%)	
(N) 教材	(N-1) 辞書の保管場所	1 (0.2%)	1 (0.2%)
(O) 掲示物	(O-1) 学習の流れ	12 (2.2%)	44 (7.9%)
	(O-2) 学習経過	11 (2.0%)	
	(O-3) 掲示物の位置	1 (0.2%)	
	(O-4) 必要な掲示物のみにする	8 (1.4%)	
	(O-5) 学習成果	12 (2.2%)	
(P) 教授メディアの常設	(P-1) 実物投影機	7 (1.3%)	16 (2.9%)
	(P-2) スクリーン	4 (0.7%)	
	(P-3) OHP	5 (0.9%)	

表2 授業観察の水準別に見た授業観察の視点

項目	サブカテゴリー	視点の数 (割合)	項目の合計 (割合)
授業の導入、展開、まとめがあるか、などから授業を見る	(A-3)授業の終わりのまとめが適切	9 (1.6%)	9 (1.6%)
授業のスピードを考えているか、などから授業を見る	(B-5)理解度を把握するための手だて (B-1)机間指導	10 (1.8%) 14 (2.5%)	24 (4.3%)
目的に対して取り上げる教材の選択が適切であるか、から見る	(A-6)身近な教材の活用 (A-4)教科書の活用	1 (0.2%) 9 (1.6%)	10 (1.8%)
児童・生徒のやる気や理解を促す方法が工夫されているか、などから授業を見る	(A-5)子どもたちの理解を促す手立て (B-3)子どもの発言をしっかりと聞く (B-4)発言を促す手立て	13 (2.3%) 3 (0.5%) 1 (0.2%)	17 (3.1%)
指示が明確か、適切な場面、タイミングでなされているか、などから授業を見る	(A-2)発問の内容が具体的である	1 (0.2%)	1 (0.2%)
声の大きさやトーン、ノンバーバルな表現、視覚刺激などをうまく活用しているか、などから授業を見る	(C-1)表情、身ぶり、手ぶりをに入れて話す	2 (0.4%)	2 (0.4%)
基本技能	(D-1)板書カードの準備等	37 (6.7%)	145 (26.1%)
	(D-2)計画的に板書をしている	35 (6.3%)	
	(D-7)黒板の整理	2 (0.4%)	
	(J-2)下敷きを敷く	2 (0.4%)	
	(J-3)ノートの内容が同じ	14 (2.5%)	
	(J-4)色の使い分け	12 (2.2%)	
	(J-5)子どもたち自身が考え見やすく書いている	6 (1.1%)	
	(J-7)ノートを書くスピードが教師と同じ	3 (0.5%)	
	(L-2)定規の活用	17 (3.1%)	
	(L-3)実物投影機の活用	17 (3.1%)	
授業中の学習活動に関する時間配分が適切であるか、から授業を見る	(D-4)板書が速すぎたり遅すぎたりしない	3 (0.5%)	3 (0.5%)
授業の始まりと終わりにおける子どもたちの教室への出入り、授業中での資料配布等のスムーズさなどから授業を見る	(L-1)配布物の処理	13 (2.3%)	13 (2.3%)
学ぶためのルールを教室で作っているか、から授業を見る	(D-6)板書で定規を活用	18 (3.2%)	57 (10.3%)
	(G)学習規律の維持につとめているか	4 (0.7%)	
	(I)教科書の持ち方	1 (0.2%)	
	(J-1)ノートを書く姿勢	4 (0.7%)	
	(J-6)鉛筆の活用	1 (0.2%)	
	(K-1)話の聞き方	8 (1.4%)	
	(K-2)発表の仕方	13 (2.3%)	
(K-3)姿勢	8 (1.4%)		
学校の玄関、廊下などの掲示・環境などから学校の雰囲気・大切にしていることなどを感じ取る	(O-1)学習の流れ	12 (2.2%)	44 (7.9%)
	(O-2)学習経過	11 (2.0%)	
	(O-3)掲示物の位置	1 (0.2%)	
	(O-4)必要な掲示物のみにする	8 (1.4%)	
	(O-5)学習成果	12 (2.2%)	
教材・教具の準備が授業のねらいと関わってよくできているかを見る	(D-1)略案	2 (0.4%)	15 (2.7%)
	(D-2)プリント準備	13 (2.3%)	
一斉、グループ、個別といった学習形態を目的や状況に応じて活用しているか、などから授業を見る	(A-1)指導内容に応じた学習形態	13 (2.3%)	43 (7.7%)
	(H)協働学習の様子	27 (4.9%)	
	(F)授業形態	3 (0.5%)	
発問を児童生徒の応答を読み取って（先取も含む）、また状況に応じてうまく使い分けているか、から授業を見る	(B-2)児童の発言やつぶやきを大切に、学級全体のものにするように工夫	5 (0.9%)	5 (0.9%)
視覚的教材、地図、グラフ、統計、テキスト、黒板、OHP、ワークシート、情報技術をねらいや内容、子どもの様子に応じて適切に用いているか、から授業を見る	(D-8)スクリーンの活用	21 (3.8%)	39 (7.0%)
	(D-9)タイマーの活用	1 (0.2%)	
	(D-10)実物投影機の活用	17 (3.1%)	
子どもが学びやすい学習環境（目的に応じた机の配置、席次、子どもが利用しやすい道具の用意）になっているか、などから授業を見る	(M-1)什器	4 (0.7%)	96 (17.3%)
	(M-2)机上	28 (5.0%)	
	(M-3)空調	1 (0.2%)	
	(M-4)採光	1 (0.2%)	
	(M-5)整理整頓	61 (11.0%)	
学習のねらいと関わって現在の学習の達成度を学級のみんなに説明している、から授業を見る	(N-1)辞書の保管場所	1 (0.2%)	17 (3.1%)
	(D-3)導入で何を学ぶかはっきりさせる (D-5)目標をはっきりさせる	3 (0.5%) 14 (2.5%)	
教室空間を効果的に利用できているか、から授業を見る	(P-1)実物投影機	7 (1.3%)	16 (2.9%)
	(P-2)スクリーン	4 (0.7%)	
	(P-3)OHP	5 (0.9%)	

表3 教授技能の水準別に見た授業観察の視点

項目	サブカテゴリー	視点の数の合計 (割合)	項目の合計 (割合)	
基本技能	(A-4)教科書の活用	9 (3.6%)	174 (68.5%)	
	(A-6)身近な教材の活用	1 (0.4%)		
	(D-1)板書カードの準備等	37 (14.8%)		
	(D-2)計画的に板書をしている	35 (14.0%)		
	(D-3)導入で何を学ぶかはっきりさせる	3 (1.2%)		
	(D-4)板書が速すぎたり遅すぎたりしない	3 (1.2%)		
	(D-5)目標をはっきりさせる	14 (5.6%)		
	(D-6)板書で定規を活用	18 (7.2%)		
	(D-7)黒板の整理	2 (0.8%)		
	(D-8)スクリーンの活用	21 (8.4%)		
	(D-9)タイマーの活用	1 (0.4%)		
	(D-10)実物投影機の活用	17 (6.8%)		
	(D-2)プリント準備	13 (5.2%)		
話し方	—	0 (0.0%)	0 (0.0%)	
動作	(C-1)表情、身ぶり、手ぶりを入れて話す	2 (0.8%)	16 (6.3%)	
	(B-1)机間指導	14 (5.6%)		
中級技能	発問	(A-2)発問の内容が具体的である	1 (0.4%)	1 (0.4%)
	指示	(B-2)児童の発言やつぶやきを大切にし、学級全体のものにするように工夫	5 (2.0%)	19 (7.5%)
		(A-5)子どもたちの理解を促す手立て	13 (5.2%)	
		(B-4)発言を促す手立て	1 (0.4%)	
	受け入れ	(B-3)子どもの発言をしっかり聞く	3 (1.2%)	13 (5.1%)
(B-5)理解度を把握するための手だて		10 (4.0%)		
励まし	—	0 (0.0%)	0 (0.0%)	
伝達の仕方	—	0 (0.0%)	0 (0.0%)	
テンポ、リズム	—	0 (0.0%)	0 (0.0%)	
ポイント	—	0 (0.0%)	0 (0.0%)	
感動	—	0 (0.0%)	0 (0.0%)	
上級技能	流れ	(A-1)指導内容に応じた学習形態	13 (5.2%)	27 (10.6%)
		(A-3)授業の終わりのまとめが適切	9 (3.6%)	
		(F)授業形態	3 (1.2%)	
		(D-1)略案	2 (0.8%)	

## 5. まとめと今後の課題

本研究では、教員養成課程の学生が授業観察を通してどのような視点を持ち、授業を把握することができているのかを明らかにすることを目的に、学生の授業観察の視点を3つに分類した。学生の授業観察の3つの視点は、「教師の指導」、「子どもの学習活動」、「学習環境」であった。

そこで、授業観察の視点を基本技能、中級技能、上級技能で分類を試みた結果、学生は授業観察を通して、基本技能にあたる視点を多く有しており、中級技能、上級技能と上がるにつれて、授業観察の視点の数が減少していることが示唆された。

また、「教師の指導」において、教授技能の指標に基づいて分析した結果、教授技能の基本技能にあたる視点を多く有しており、中級技能、上級技能と上がるにつれて、授業観察の視点の数が減少していることが示唆された。このことから、授業観察力と教授技能の関係性が検討された。

授業観察力と教授技能の関係性は、「教師の指導」のみでなく、「子どもの学習活動」や「学習環境」においても、同様に関係していることが考えられる。教授技能の水準のような指標を「子どもの学習活動」や「学習環境」でも開発し、授業観察力と教授技能の関係性を今後検討していきたい。

また、本研究では、教員養成課程の学生の経験の差については検討されていない。しかし、教員養成課程の学生の経験の差が授業観察力に影響していることも考えられるため、今後、調査対象者の経験における影響も検討していく必要があるだろう。

### 謝辞

調査に協力して下さったY小学校の皆様、また学生の皆様に感謝申し上げます。

### 参考文献

秋田喜代美, 佐藤学, 岩川直樹 (1991) 教師の授業に関する実践的知識の成長: 熟練教師と初任教師の比較検討. 発達心理学研究, 2 (2) : 88-98  
芥川元喜, 澤本和子 (2003) 新卒臨時採用教師

における実践的認識の形成: カード構造化法を適用した事例の考察. 日本教育工学雑誌, 27 (1) : 93-104

中央教育審議会 (2010) 教員の資質能力向上特別部会 (第7回) 配布資料1 審議経過報告 (案).

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo11/shiryo/attach/1299758.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo11/shiryo/attach/1299758.htm) (参照日 2019.1.9)

中央教育審議会 (2015) これからの学校教育を担う教師の資質能力の向上について: 学び合い, 高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて.

[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2016/01/13/1365896\\_01.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/01/13/1365896_01.pdf) (参照日 2018.8.15)

深見俊崇 (2015) 1年次における教員志望学生の授業観察力量を向上させるためのカリキュラムデザイン. 日本教育工学会論文誌 39 (3) : 201-208

本多博, 畑中大路, 藤井佑介, 高橋純, 堀田龍也 (2017) 小学校管理職の授業観察の視点と洞察に関する検討. 日本教育工学会論文誌, 41 (suppl.) : 181-184

瀧辺美由紀, 堀田龍也, 黒上晴夫 (2000) 学習環境構成と教師の意図に関する継続分析. 日本教育工学雑誌, 24(suppl.) : 153-157

北尾倫彦, 速水敏彦 (1986) 教授技能の分析的研究: 実習生と熟練教師を比較して, 大阪教育大学紀要第V部門: 教科教育, 34 (2) : 171-178

丸山悟, 吉井彰宏, 水落芳明 (2013) 体育科のティームティーチングにおけるトランシーバーによる先輩授業者の発話の聴取が後輩の発話に与える効果に関する事例的研究. 日本体育工学会論文誌, 37 (suppl.) : 133-136

三島知剛 (2008) 教育実習生の実習前後の授業観察力の変容: 授業・教師・子どもイメージの関連による検討. 教育心理学研究, 56: 341-352

三島知剛 (2009) 教職志望学生の授業観察視点の検討: 授業・教師・子どもイメージとの関連による検討. 日本教育工学会論文誌 33

(1) : 103-110

三島知剛 (2010) 教職志望学生の授業観察力に関する研究 (4) : 実習中の授業検討会に対する認知と授業観察力の変容との関連に着目して. 日本教育心理学会総会発表論文集, 52 : 196

森博文, 岸本肇, 廣瀬勝弘, 栗原武志 (2004) 教職経験年数の違いによる授業観察時の思考の差異 : 同時発話プロトコル分析から. 日本体育学会大会号, 55 (114J) : 214

文部科学省 (2011) 教師の資質後方方策の見直し及び教員免許更新制の効果検証に係る調査.

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/sankou/\\_icsFiles/afieldfile/2011/02/24/130](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/sankou/_icsFiles/afieldfile/2011/02/24/130)

2602\_01\_1.pdf (参照日 2018.8.26)

大島崇行, 石井慎太郎, 水落芳明 (2016) 大学生の授業観察力の向上に関する事例研究 : タブレット型端末を活用した現職大学院生との観察比較検討会を通して. 科学教育研究, 40 (2) : 209-221

小柳和喜夫 (2009) 学部から大学院につながる体系的な観察実習の方法. 奈良教育大学教職大学院研究紀要 (学校教育実践研究), 1 : 79-86

脇本健弘 (2015) 教師をめぐる今日の状況 : 社会背景. 脇本健弘, 町支大祐 (著) 教師の学びを科学する : データから見える若手の育成と熟達のモデル. 北大路書房, 京都 : 1-14